

陳述意見書(追加補足分)

## 全中大会業務が7月以後に集中せざるをえない理由と 免外担当によるアクシデントについて

仙台市立大沢中学校教諭 大木 一彦

1) 11月26日の口頭陳述の機会に述べさせていただいた中体連業務について、補足します。

前回述べたとおり中学校の部活動の顧問は、3月末に教職員の人事異動が行われる関係で、どこの学校でも4月にならないと決めることができません。市あるいは県の役員も各校の顧問が決まった後、4月中旬に各部ごとの顧問会議を開催して、その中から委員長、副委員長などが互選されます。お世話役は校長会で決められた各部会長の校長があたります。各部一斉でないで開催できませんから、すべて出張で参加します。各学校の校務分掌への位置づけや、校長の命令で出かける校務出張であることを考えれば、部活動の顧問も中体連の役員もすべて校務と考えるのが当然と思います。

もちろん、平成10年に開催された全国バドミントン大会などのように、全国大会を開催するような場合はすべて4月からでは間に合いません。大友先生は仙台市中体連バドミントン専門部の委員長、宮城県中体連バドミントン専門部の副委員長として、県委員長の小川先生とともに平成8年、9年度の全中大会の視察にも参加していますが、バドミントン部の中では少なくとも全国大会を成功させる中心メンバーとして確認されていたはずで

す。しかし、前述のように大会を準備する体制(実行委員)はその年度の4月にならないと決まらないわけですから、それまでの実務や実行委員会を組織する準備、活動計画などは小川、大友の両名で取り組むしかなかったと思います。その後の役割分担から考えても、大友先生が実務の中心になっていたことは間違いありません。

2) 平成10年度、全中大会が開催された年も、例年と同様に4月から各部の体制ができて動き出しています。しかし、新年度の4月はどこの学校でも校内の研究体制の確立や年間行事計画の作成、生徒会の活動計画の確立など、1年で最も忙しいときですから校内での部活指導が中心で中体連の活動には殆ど時間を割くことができません。

5月から中体連としての活動が始まります。まず6月の仙台市中学校総合体育大会に向けて生徒の指導、大会の準備に追われます。そして6月末には学期末テストが行われますから、その対応(テスト作成、採点、成績評価)にも追われます。7月には宮城県中学校総合体育大会、8月には東北大会と続きますが、各部の委員長や副委員長はそのすべてに責任を負わなければなりません。

実際に全国大会の準備にあたることができるのは、仙台市の大会が終わり、期末テストが終わった後でなければ実質的には不可能です。ですから、7月にならないと本格的な全中大会の準備は始められないのです。

3) 大友先生は全中大会副実行委員長・総務部長の役にありましたから、7月以前から実行委員会の活動計画や仕事の分担、大会当日までの具体的段取りを検討し準備を始めていたと思います。当然、他のだれよりも仕事量も多かったし、大会に向けての心労は大きくなり始めていたと思います。

大友先生は、この平成10年度に初めて免許を持たない社会科の担当もしています。専門の英語科の他に社会科も指導するのですから、相当大変なことだったと思います。中学校の教員にとっては、自分の指導する教科で生徒たちがどのように学び理解してくれるか、これはものすごく大きな問題です。まして英語も社会科もいわゆる「受験教科」ですから、内申書を考えても受験を考えても責任を感じざるを得ないのです。

当時の中山中学校の澤藤校長の証言にもありますが、大友先生が担当した社会科は、彼が教えたクラスだけが平均点で差がつきとても悩んでいたといわれます。私も免許外教科の担任をしたことがありますが、経験もないしものすごく不安があるものです。まして、成績が芳しくなかったら、間違いなく大きなショックとして残ります。6月末にテスト、7月初めに採点・評価となりますから、ちょうど全中大会で忙しくなる直前に、大友先生は教師として最も辛い経験をしていたこととなります。まじめな教師ですから、これは相当の精神的アクシデントになったのではないのでしょうか。

4) 7月以後、本格的に全中大会の準備が進みますが、まず全国の役員・関係者に届けなければならない大会の業務必携の作成にかかります。前年度のもので参考になるものもあるでしょうが、基本的に各県ごとに最初から作成せざるをえません。当然実行委員会の中で分担するにしても、総務部長の分担は比重が大きくなりますし、決められた日程まで全員の分担部分を集約し、校正し、印刷に回さなければなりません。その間の諸会議の準備や各県との連絡(渉外)を含めると、勤務が終わった後の仕事には限界があります。

結局毎日午後7時8時からの打合せや資料作成になったし、夏休みに入った後は連日15～16時間もの取り組み(途中に部活動の指導や学校の分担業務も含む)になったのだと思います。

当時の学校現場は月2～3回は土曜日も授業日でしたから、その分(土曜休の分)を夏休みにまとめて休む形になっていました。その日は部活指導や勤務をさせてはならない日でしたから、帳簿上は休日にしながら「もぐり」で部活指導をしているのが中学校の実態です。大友先生は、それに全中大会の準備もあったわけですから、表に見えない「勤務」は膨大なものだったと予測されます。原則として「時間外勤務はない」とされている学校現場であるために、勤務時間外の勤務については全く掌握されていないという問題があります。

7月以後全中大会まで、大友先生が身も心もぼろぼろになるほど大変な業務をこなさなければならなかったことについて、審査会が誠意と人間的な温かさで判断して下さることを心から期待し、補足陳述にさせていただきます。